

図-2 東京(築地)

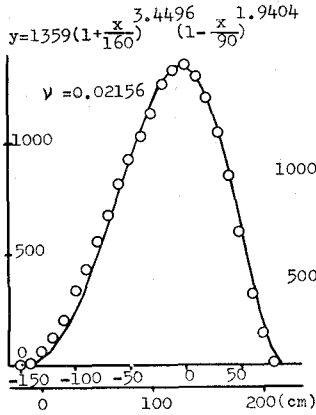


図-3 名古屋

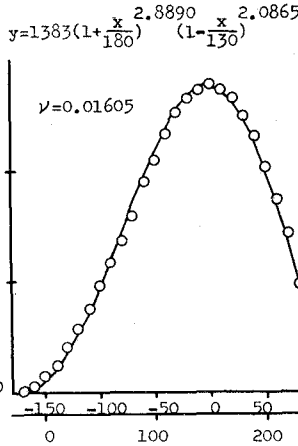
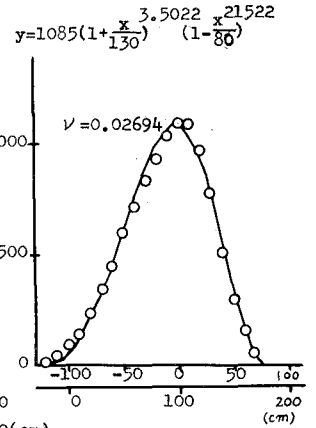


図-4 神戸



3. 満潮面および干潮面の頻度分布

潮位の分布が Pearson I 型の分布曲線で示されるならば、当然、満潮面および干潮面の分布は、(1) 式を微分して示されるはずで、分布曲線式は、

$$Y = y_0 \left(\frac{1}{2} + \frac{x}{\Delta}\right) v x \left(1 + \frac{x}{\Delta}\right)^{v-1} \left(1 - \frac{x}{\Delta}\right)^{v-1} \Delta x \quad (3)$$

になる。ここに、 Δx は階級値の間隔である。したがって、東京(築地)、名古屋、神戸について分布を求めると、図-5~10 のようになり、(3) 式により十分に近似されよう。

4. おすび

1) 天文潮位も確率変数とせしむるとき、その統計結果が両端有限の釣鐘状であるか、Pearson I 型あるいは II 型の分布曲線にあてはめることができると思う。

2) Pearson I 型あるいは II 型の分布曲線式の係数を求めるには、この方法で十分に実用的であると思う。

3) これより、各種の統計的に意義のある値を設計上使用するのがよいと思う。

(参考文献) 佐藤良一郎;『数値統計学』(培風館、大室、竹沢;『海防構造物の設計基準水高について』(第11回海岸工学講演会講演集、1966)

図-5 東京(築地)満潮面

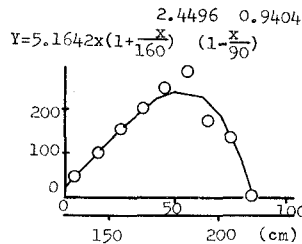


図-6 名古屋満潮面

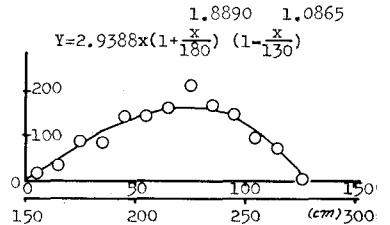


図-7 神戸満潮面

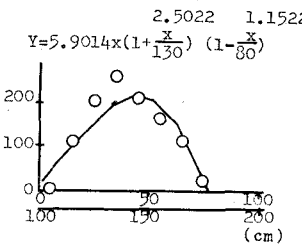


図-8 東京(築地)干潮面

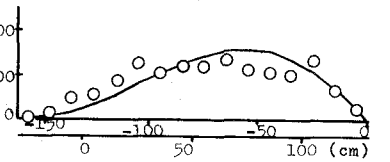


図-9 名古屋干潮面

